



—ふるさとながと・こんにちわ—

ふるさと、帰りたいけど帰れない

私が生まれ育った長門市通は、廻りが海に囲まれた離島でした。青い海原と岩をも砕く荒波は、私にとって忘れられない風景です。少年時代、山から笹竹を切って釣竿を作り、港で魚を釣ったことも思い出します。学校に通った坂道の満開の桜が春になると目に浮かぶのは私だけではないでしょう。私は現在、下関市長府にいます。ふるさとを語るには、ちよつぱり面はゆく、車で1時間ちよつとで帰れるのにめつたに帰らない無精もん。しかし心の中では、いつもふるさとを意識しており、同級生たちが、地元で活躍しているのを聞くとうれしく、陰ながら応援しております。先日仕事で長門に行き、ルネッサながとと図書館に入

ってみました。広い空間と落ちつきのある建造物で、下関にないゆとりがここにはあります。維持管理も大変でしょう。下関も同じ問題を抱えています。いい物を見たり、いい音を聞く環境の場所として、長門市のシンボルとして育つてもらいたい。ふるさと離れて30数年。唄の文句じゃないけれど、「帰りたいけど帰れない」老後はふるさとでと思うが、私をいつも暖かく迎えてくれる「ふるさと」にありがとう。

安森 幸男 さん

やすもりゆきお／昭和22年生／下関市在住／通6区出身／(株)サン山口勤務



▲高校2年文化祭の演劇で

新製品に夢を

—達者です—



松浦 龍瑞 さん

まつうらりゆうずい／83歳／新屋敷町区

「現在、娘と水産加工業を営んでいます。戦前満鉄社員として働いていましたが、終戦後仙崎で観光案内、土産物として、夏みかんなどの菓子職人、野菜仲買、水産加工業として、商売を始めました。」と松浦さん。「1日の日課は、早朝に野菜市場に出かけ、その後、湯本温泉の朝風呂に入り、後は水産加工品の新製品を考えたりする事くらいです。」と言われ、過去、新製品（水産加工品）を発明され、数々の農林水産大臣賞を受けておられました。



▲平成8年にテレビ放映（日本初のふく薫製）されたときの様子